

## 梅浦精一の足跡と活動（Ⅰ）

松本和明

### 要旨

渋沢栄一の絶大なる信頼を受けてビジネスパートナーの一人として活躍し、「渋沢の股肱」（実業之世界社編輯・発行『財界物故傑物伝』1936年）と評された、長岡出身の梅浦精一の足跡と活動について考察していきたい。

梅浦は長岡藩医の脩介の長男として生まれた。脩介は長岡藩の藩医を務め、東洋、西洋医学ともに長ずる、先進的かつ優れた漢蘭折衷医であった。

梅浦は漢学にも造詣が深かった脩介の影響を強く受けて幼少期から学問への興味を抱き、刈羽郡南条村で藍沢南城が主宰していた三余堂で漢学を学び始めた。

続いて、長岡藩の代表的な儒学者である山田愛之助に師事してオランダ語を学んだ。

周知のとおり、山田は崇徳館の教授・都講として、小林雄七郎さらには外山脩造も指導した。雄七郎と外山は梅浦の生涯に大きな影響を与えたが、彼らとの関係構築は山田の門人となったことが大きなきっかけであった。

その後、江戸に出て西洋医学を学ぶものの、学費が続かなくなり、洋学に転じた。

1872年に大蔵省に入り、A・シャンドの指導のもとで、小林雄七郎などととも、近代複式簿記の翻訳を『銀行簿記精法』として完成させた。これの普及に尽力した1人が外山である。

1873年には新潟県令の楠本正隆から招かれて一等訳官に着任した。あわせて楠本の主導により創設された洋学校である新潟学校の責任者を担い、学生に加えて教員にも英語を講じた。同校は新潟県の中等教育機関の嚆矢である。さらに、長岡洋学校の後継である新潟学校第一分校でも教鞭をとっている。

キーワード：梅浦精一、洋学・英学、渋沢栄一、『銀行簿記精法』、小林雄七郎と外山脩造、新潟学校

### はじめに

本研究の課題は、現在の新潟県長岡市出身の企業家ないし経営者である梅浦精一（1852年～1912年）の活動および事績についてちいって検討することである。

梅浦は、渋沢栄一の絶大なる信頼を受けてビジネスパートナーの1人として活躍し、「渋沢の股肱」<sup>1)</sup>と評された。その人物像は企業家史ないし経営史研究、渋沢栄一研究の両面で解明されるべきである。

これまでのところ、梅浦に関しては、島田昌和氏が渋沢との関係を中心にひととおり考察している<sup>2)</sup>。しかし、梅浦の企業者活動の実態が明らかになっているとはいいがたく、実証的な考究の蓄積が必要かつ不可欠である。

梅浦は自叙伝を残しておらず、伝記ないし評伝の文献もたいへん乏しい。そこで、本研究では、関係した地域や組織・団体および企業などからはばひろく資料を収集して、その足跡を跡づけていく。

1) 実業之世界社編輯・発行『財界物故傑物伝』1936年、208頁。

2) 島田昌和「梅浦精一による経営のサポート」（『渋沢栄一の企業者活動の研究—戦前期企業システムの創出と出資者経営者の役割—』日本経済評論社、2007年、156～159頁所収）。

本稿では、紙幅の都合から、梅浦の生い立ちをはじめ、幼少期・青年期における人間ないし人格の形成、学理・学識の蓄積とその成果、さらには実務に関わってのキャリアの構築のプロセスを中心に論じていくこととしたい。

梅浦に関する基本的な史実は、特に断らない限り、洋学ないし英学史研究の泰斗の蒲原宏氏による貴重な研究である「梅浦精一（元善）の生涯と業績」（日本英学史学会『英学史研究』第17号、1984年）に依拠している。

なお、梅浦については、洋学史、教育史、簿記史あるいは会計史研究で取り上げられることがあるものの、残念ながら「梅津」ないし「梅原」との誤記が散見される。これを正すのも意図していることを付言しておく。

## 1. 生い立ちおよび多様な学習経験と人間関係の形成

梅浦は、1852（嘉永5）年2月13日に、長岡藩の藩医を務めていた脩介の長男として生まれた。幼名は敬助と名付けられ、後には元善あるいは沢善居と号した。

脩介は漢方医であった父（初代・脩介）を継承すべく水戸城下で本間棗軒に医学を学び、長岡城下で開業したのち長岡藩の藩医を務め、東洋、西洋医学ともに長ずる優れた漢蘭折衷医であった。長岡に種痘を広めるなど、先進的な領域に秀でていた。

梅浦は、漢学にも造詣が深かった脩介の影響を強く受けて幼少期から学問への興味を抱き、1861（文久元）年・10歳から刈羽郡南条村（現・新潟県柏崎市）で藍沢南城および山崎朴齋が主宰する三余堂（あるいは三余塾）にて漢学を学び始めた。

三余堂は論語をはじめとする中国の古典を偏りなく取り上げる折衷学派にたった。その教授方法は素読および講読と多様で、教育方針は柔軟性と実用性を重視した<sup>3)</sup>。梅浦も含めて若き生徒には有用であったといえる。

三余堂の水準の高さはこの当時の越後国で広く知られており、同国内はもとより信濃・越前国などからも集結し、その数は2千人を超えたとされる。

同窓生には、刈羽郡横沢村（現・長岡市小国地域）の山口権三郎および山口の次弟の野本恭八郎などがある。

山口権三郎は、1838（天保9）年に平三郎の長男として生まれた。12歳から2年間三島郡片貝村（現・新潟県小千谷市）で丸山貝陵が主宰する耕読堂で学んだ後、1851年・14歳から2年間学んでいる<sup>4)</sup>。

山口は、日本石油（現・ENEOS）および新潟鉄工所、長岡銀行（現在の第四北越銀行のルーツ）の創業や信濃川での水力電気事業を主導するとともに、第四・第三百三十九国立銀行取締役や新潟県

3) 新潟県編集・発行『新潟県史 通史編5 近世Ⅲ』1988年、530～532頁。

4) 広井重次編著『山口権三郎翁伝』岩瀬直蔵、1934年、4頁。

会議長（第2・4・5・6代）などを歴任した。

山口と梅浦は、渋沢などとともに、現在のJR信越本線のルーツである北越鉄道の設立と敷設に創立委員として尽瘁している。

恭八郎は1852年に平三郎の四男として生まれた。梅浦と同年である。1864年・13歳から3年間学んだ。当時について「精神的にも学問的にも、後の互尊翁（恭八郎：引用者）を造り出すべき基礎工事となつた」<sup>5)</sup>とふりかえられているが、梅浦にとっても同様であったと思われる。

恭八郎は長岡で旅館や金融業を営む野本家の養子となり、不芳であった家業の再建に注力するとともに、第六十九国立銀行（現在の第四北越銀行のルーツ）や長岡電灯の取締役、長岡商工会会頭、新潟県会議員、長岡町会副議長、長岡市学務委員などを歴任した。「互尊思想」を提唱して、長岡市に図書館建設費を寄付したことをはじめ（1917年に大正記念互尊文庫として開館）、長岡市教育会会長や日本互尊社の創設など社会事業家としても活躍した。

このうち、長岡商工会は、1887年に恭八郎および岸宇吉（第六十九国立銀行第4代頭取や日本石油理事、北越鉄道監査役などを歴任）、小林伝作（織物商・石油商・第六十九国立銀行取締役）、野本松二郎（醤油醸造業）を中心に立ち上げられ、「商工業ノ全般ニ関スル利害得失ヲ審議シ専ラ該業ノ改良進歩ヲ図ル」<sup>6)</sup>（規則第二条）を目的とした。長岡における経済団体のルーツの1つである。東京商法会議所および東京商工会で役職員を務めていた梅浦との間で情報交換がおこなわれたとみられる<sup>7)</sup>。

1864（元治元）年・13歳の時点から、梅浦は、長岡藩の代表的な儒学者である山田愛之助に師事しオランダ語の初歩や西洋事情を学んだ。

山田は、1816（文化13）年に長岡藩医の宗沢の家に生まれ、名は錫、通称として政尚も用い、後に到处と号した。同藩の儒学者の秋山景山に古辞学を学んだ。学業優秀であったため、藩から選ばれて高野松陰や鈴木鈍叟とともに江戸に留学し、古賀洞庵に朱子学、伊東玄朴に蘭学を学んだ。帰郷後に同藩の藩校である崇徳館の教授となり、後に都講に就いている。

山田は、小林虎三郎や三島億二郎、河井継之助および虎三郎の実弟である雄七郎などの若手藩士たちはもとより、藩士以外でも外山脩造などの長岡一円の有為な若者も直接指導している。梅浦と雄七郎や外山とはその後のそれぞれの人生に影響をあたえあったが、山田の門人となったことが人間関係構築の大きなきっかけである。

漢学、洋学ともに通暁している山田に師事したことで、多様な知識と柔軟な思考がさらに育まれたのである。

5) 丸田亀太郎編輯『互尊翁』財団法人日本互尊社、1937年、12頁。

6) 長岡商工会議所発行『長岡商工人 百年の軌跡』2011年、495～496頁（筆者執筆）。

7) 長岡商工会を1つの起源として、1905年3月に長岡商業会議所が創設されたが、同年7月に渋沢が長岡を訪問した際に同所の依頼におうじて講演し、商業会議所の意義を強調した（拙稿「渋沢栄一と新潟市域」新潟国際情報大学『国際学部紀要』第4号、2019年4月、119頁）。

1865（慶応元）年1月に脩介が死去したが、梅浦の向学心は衰えることなく、かつ向上心（アスピレーション）はますます高まっていった。

梅浦は、1868（慶応4）年に江戸へ赴き、石井謙道（研道）のもとで西洋医学を学びはじめた。しかし、たびたび窃盗被害を受けたため学費が続かなくなり、1年ほどで学業を断念する危機に直面した。これに対して、原田豊や岡玄卿（後に宮内省侍医頭や宮中顧問官を歴任）などの友人たちが支援の手を差し伸べ、日本橋茅場町で開業していた医師の溝部有山のもとに身を寄せることとなり、診療を手伝いながら医学を学んだ<sup>8)</sup>。

その後、梅浦は「医業の器にあらざることを自覚」<sup>9)</sup>するとともに、その関心は医学から洋学に移っていった。

ついに梅浦は意を決し溝部のもとを離れ、1868年から71年に箕作秋坪が率いる三叉学舎、次いで73年まで尺振八が率いる共立学舎で学んだ。

両校はともに100名以上の学生を擁し、慶応義塾と並び当時を代表する洋学塾と評されていた。

三叉学舎は1868年11月に立ち上げられ、梅浦は第1期生であった。三叉学舎はアダム・スミスの『国富論』などを原書で学ぶとともに漢学の学習も重視した<sup>10)</sup>。梅浦は「忽ち其門生中に嶄然頭角を表はす様にな」り、箕作は「非常に望みを嘱し」、「外の門生を見ても常に梅浦を見たと誇揚し、且つ戒めた」<sup>11)</sup>という。箕作の高評価が長岡にも知られるところとなり、親戚や友人から資金援助が相次いだ。梅浦はいつそう学業に力を入れた。

共立学舎および後に取り上げる尺が初代局長を務めた大蔵省翻訳局に関しては、鈴木栄樹氏による詳細な研究がある。両所の史実はこれに依っている<sup>12)</sup>。

共立学舎は1871年10月に創設された。共立学舎は発音や会話、英文和訳や和文英訳を中心とする実践的な学習を展開するとともに、算術・数学や経済学さらには漢学も講説した。現在のゼミナール形式にあたる「輪講」が重視された。

共立学舎の関係者のなかで、その後の梅浦の活動と深い関わりをもつこととなるのが須藤時一郎と波多野伝三郎である。

須藤は1841（天保12）年に幕臣の高梨仙太夫の長男として生まれ、昌平坂学問所で漢学を学び、63年の外国奉行・池田長発が率いる横浜鎖港談判使節団（第二回遣欧使節）の通訳に尺とともになった。共立学舎では「社中」との立場で尺をサポートしている。その後大蔵省翻訳局さらに銀行課での勤務を経て（紙幣助兼銀行課長助に累進）、76年に第一国立銀行に入行し、佐々木勇之助などから

8) 柳元静馬『財界名士失敗談 上巻』毎夕新聞社、1909年、158頁。

9) 前掲『財界物故傑物伝』208頁。

10) 故阪谷子爵記念事業会編纂・発行『阪谷芳郎伝』1951年、54～57頁。

11) 墨堤隠士『商人立志 豪商の雇人時代』大学館、1905年、107頁。

12) 「尺振八の共立学舎創立と福沢諭吉」(史学研究会『史林』第73巻第4号、1990年7月)、「開化政策と翻訳・洋学教育—大蔵省翻訳局と尺振八・共立学舎」(山本四郎編『近代日本の政党と官僚』東京創元社、1991年)。

簿記や実務を学んだ。86年から96年に取締役、続いて監査役を1903年に死去するまで務めた<sup>13)</sup>。この間、78年に群馬県前橋町で設立された第三十九国立銀行（現在の群馬銀行のルーツ）および同県館林町で設立された第四十国立銀行の指導をおこなった。前者では監査役に就いた<sup>14)</sup>。このほか、東京瓦斯や東京板紙（現在の日本製紙のルーツ）の取締役、東京貯蓄銀行の監査役を務め、梅浦と同様に渋沢の広範な企業者活動を支えた。また、衆議院議員なども歴任している。自由民権運動に尽力した沼間守一および高梨哲四郎は実弟である。

波多野は1856（安政3）年に長岡藩士の前田繁左衛門の子として生まれ、のちに波多野影雲の養子となった。幼少期は崇徳館で学び、73年には前年に創設された長岡洋学校に入学した。翌74年に共立学舎に入った。その後教壇に立ち、79年には病を得た尺に替わり舎長として運営を主導した。文部省や東京横浜毎日新聞での勤務を経て、新潟県会議員や衆議院議員（立憲改進黨・新潟県第5区で5回当選）および福井県知事を歴任した<sup>15)</sup>。1902年に梅浦とともに宝田石油（現在のENEOSのルーツ）の監査役に選任され、翌03年から06年までは取締役を務め、創業者で社長の山田又七を支えた<sup>16)</sup>。また、南北石油の取締役や日東石油の監査役を務め、梅浦とともに北越鉄道の創設に力を注いだ。

ところで、両校の同窓生としては、三叉学舎出身が原敬や阪谷芳郎（大蔵大臣や東京市長などを歴任、渋沢の次女琴子と結婚）、平沼淑郎（早稲田大学教授・経済学者）・騏一郎兄弟、大槻文彦（『言海』を編さん）、本山彦一（大阪毎日新聞社長）、共立学舎出身が経済学者で『東京経済雑誌』を刊行し両毛鉄道社長や衆議院議員なども歴任した田口卯吉および東京横浜毎日新聞社長や衆議院議長などを務めた島田三郎、高梨哲四郎、明治法律学校（現・明治大学）で理財学を講じた乗竹孝太郎や『国富論』の全訳をてがけた石川暎作、さらには外山脩造や青柳逸之助などがあげられる。

このうち、青柳逸之助は、1845（弘化2）年に三島郡河根川村（現・長岡市）で医師である逸庵の長男として生まれ、叔父にあたる剛斎のもとで漢学を学んだ。1865年には昌平坂学問所に進んだ。明治維新後には大学南校および共立学舎で英学を修めた。その後長崎に赴いて長崎駐在イギリス領事のジョン・クインから英語を学び、1872年には『英和通弁手引草』および『交際必携英和对読』と題する英語の日本語への翻訳に関する2冊の文献を刊行している。73年に柏崎洋学校が創設されると洋学教師として赴任し、さらに梅浦が運営を担っていた新潟学校へ移籍して、両校で英語の教鞭をとった<sup>17)</sup>。

青柳は、その後、岸宇吉と三島億二郎を中心とする長岡での国立銀行創設計画に関与し、1877年

13) 第一銀行八十年史編纂室編『第一銀行史 上巻』株式会社第一銀行、1957年、548、627頁。

14) 萩原進『群馬県金融史—群馬大同銀行を中心とした—』株式会社群馬大同銀行、1952年、17～20頁、群馬銀行調査部五十年史編纂室編『群馬銀行五十年史』株式会社群馬銀行、1983年、36～37、95～96頁。

15) 渡辺幾治郎・樋口功編輯『波多野先生伝』悦心社、1913年。

16) 伊藤虎太編輯・発行『山田社長の関歴』1911年。

17) 青柳に関しては、蒲原宏「英学者としての青柳逸之助・梅浦精一」（新潟県総務部県史編さん室発行『新潟県史しおり 通史編7近代二』1988年3月）が短編ながらも有用な業績である。



に設立発起人の1人として名を連ねた。同年には、梅浦が翻訳に携わった簿記および銀行業務の知識習得のために第一国立銀行へ派遣された。翌78年4月に大蔵省から第六十九国立銀行として創立の許可を得て、同年12月に営業を開始した。青柳は取締役を選任され、出納方も兼任した。1884年まで務めている<sup>18)</sup>。

梅浦、青柳それぞれの博識に加えて相互の密接な連携により、英語および洋学教育や近代複式簿記が新潟県下への普及がすすむところとなったのである。

梅浦は、1871(明治4)年9月に『通俗英吉利単語篇 一名英語早引』(第一編上・下巻)を2冊刊行した。同書は有用かつハイレベルな英和辞典というべき文献であり、学習者に広く用いられていた。翌72年には『英語掌中熟字箋』も刊行している<sup>19)</sup>。また、同年にはジョージ・ペイン・カッケンボス(クワッケンボス)が著した英文法の独習用参考書を戸田忠厚が訳し大和屋喜兵衛が出版した『格賢勃斯 英文典独学 二號』の校閲を担当している。カッケンボスはアメリカ・ニューヨーク州で私立学校の運営に関わるとともに、広範なジャンルにわたる学習用テキストを数多く刊行した。日本では、原書、翻訳書ともに、英文法のテキストは大学南校(明治政府所轄の洋学校で69年から呼称、現在の東京大学のルーツ)をはじめとする官立学校で、アメリカ史や物理学(当時は「究(窮)理学」と称した)ないし科学のテキストは慶応義塾などの私学でも広く使われた<sup>20)</sup>。校閲を依頼されたのは、梅浦の優れた語学力が評価されたためであろう。また、それまでの梅浦は大学南校やその前身である開成学校・開成所関係者との関わりは薄く、これをきっかけに人脈が広がったこととなった。

## II. 『銀行簿記精法』の編纂への参画および簿記教育と銀行検査の変遷

梅浦にとって大きな転機となったのが、1872(明治5)年に大蔵省に入り、紙幣寮・九等出仕を任ぜられたことである。

梅浦が入省した具体的な経緯は残念ながら明らかではないが、72年6月に同省に新設された翻訳局の初代局長に就いた尺が推輓したと考えられる。

ところで、翻訳局の設置は、大蔵大輔の井上馨および三等出仕・大蔵少輔事務取扱の渋沢栄一の強い意向で実現された。同局は近代税制や銀行システムの翻訳・調査を進めるとともに、30名の生徒を採用して英語・数学・簿記の教育をおこなった。注目すべきは、局員として共立学舎の「社中」の須藤および吉田賢輔、さらに同学舎で教育にあたった乙骨太郎乙や生島準が雇用され、生徒とし

18) 北越銀行行史編纂室編『創業百年史』株式会社北越銀行、1980年、27～39頁。

19) 具体的な年月は不明であるが、『西洋勸善夜話』を松林堂から発行している。おそらくこれらの刊行と同じ時期であろう。

20) 日本の英学一〇〇年編集部編『日本の英学一〇〇年 明治編』研究社出版、1968年、362～366頁(池田哲郎氏執筆)。

て田口卯吉・島田三郎・高梨哲四郎などの同学舎の学徒が多く選ばれたことである。

大蔵省で、梅浦が渋沢との面識を得たとみられる。

梅浦は、「お雇い外国人」であるアレキサンダー・アラン・シャンド（1844年～1930年）のもとで、近代複式簿記の翻訳に携わった。

シャンドはスコットランドのアバディンで生まれ、1863年頃に来日して、翌64年に横浜に進出していたマーカントイル銀行の支配人格のポジションに就いた<sup>21</sup>。若くしての登用はシャンドの能力の高さを示すものとみてよい。ちなみに、66年にシャンドのボーイとなったのが13歳の高橋是清であった。

シャンドは、1872年に木戸孝允や井上馨の推薦で大蔵省に招聘され、同年10月1日から3年間の契約で、同省紙幣頭附属書記官として起用された。

周知のとおり、この年には、渋沢を中心に構想された国立銀行条例および国立銀行成規が、8月5日に太政官の裁可を経て、11月15日に公布に至っている。これに基づいて、翌73年から74年にかけて東京で第一国立銀行、横浜で第二国立銀行、新潟で第四国立銀行（現・第四北越銀行）、大阪で第五国立銀行の創設が構想さらに実現された。

銀行に関する法令が整えられ、起業が相次いだものの、近代的な金融システムおよび複式簿記をはじめとする会計システムの確立と普及を担える人材は政府内では不足していた。こうしたなかで、実務に長けかつ誠実な人柄のシャンドに白羽の矢が立てられたのである。

シャンドは書記官就任直後から執筆にかかり、翌73年8月までには完成させたと考えられる。紙幣頭の芳川顕正（後に文部・内務・通信大臣などを歴任）による序文の日付が8月13日になっていることから推察される。

そして、同年12月に、『銀行簿記精法』として大蔵省から刊行された。美濃半紙版和装（和とじ）の全5巻、178丁（1丁は2ページに相当）、表34枚からなる大著である<sup>22</sup>。

よく知られている史実ではあるが、『銀行簿記精法』が日本で初めて複式簿記の統一的体系を確立したこと、さらに、日本初のテキストとして、国立銀行だけでなく普通銀行や一般企業へも広く普及したことは特筆に値する。

改めていうまでもなく、シャンドは英文で執筆しており、これを解りやすくかつ短期間ないしスピーディーに日本語に翻訳するのが必要かつ不可欠であった。この重要な要務を担ったのが、梅浦を含む次の人びとである。

訳：海老原済・梅浦精一（ともに紙幣寮九等出仕）

刪補校正：小林雄七郎（紙幣権助）および宇佐川秀次郎・丹吉人（ともに紙幣寮九等出仕）

21) シャンドの事績については、土屋喬雄『シャンドーわが国銀行史上の教師ー』東洋経済新報社、1966年が必読の研究である。

22) 『銀行簿記精法』の体系や内容に関しては、土屋喬雄氏がきめ細かく解説を加えているので参照されたい（日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治大正編 第五巻』大蔵省印刷局、1956年、697～704頁）。

シャンドが書いた本文を海老原と梅浦が翻訳し、これを小林および宇佐川と丹が補訂・補足および修正を施したのである。

ここで、海老原、宇佐川、丹の足跡について、西川孝治郎氏による研究を中心にふりかえっておきたい<sup>23)</sup>。

海老原は江戸出身で、大蔵省入省後は国立銀行条例および成規の策定などに携わった。74年に八等出仕、76年に紙幣大属となった。シャンドの通訳など執務態度は堅実で、渋沢から評価された<sup>24)</sup>。

宇佐川は1849(嘉永2)年に長州・萩で生まれ、慶応義塾を卒業後の72年に大蔵省に入った。紙幣大属を経て、75年に銀行学局第2代局長、78年に銀行学伝習所学頭に就くなど簿記教育に力を尽した。また、外国文献の翻訳および簿記の調査や国立銀行の検査業務も担った。翻訳としては、アーサー・クラム(前・イングランド銀行支配人)の文献を三輪信次郎や遠藤敬止とともに訳し須藤時一郎の校閲を受けた『銀行実験論』(76年)、イギリスの簿記・会計学者のチャールズ・ハットンの文献を訳し須藤の校閲を受けた『日用簿記法』などがある<sup>25)</sup>。

丹は1852(嘉永5)年に伊予・西条で生まれ、慶応義塾を中退後に大蔵省へ入った。八等出仕、紙幣大属とすすんだ。1873年11月から翌74年2月にかけて、第四国立銀行(現・第四北越銀行)の設立発起人の本間新作および創立準備委員の鈴木長蔵に対して、宇佐川や進野簡(権中属)とともに簿記を教授している<sup>26)</sup>。

小林雄七郎の足跡については、やや立ち入って叙述していく<sup>27)</sup>。

小林は、1845(弘化2)年に長岡藩士の又兵衛の七男として生まれた。又兵衛は高潔な人格であるとともに、漢詩に長じ、武芸にも秀でていたため、藩主の牧野家から大いに信頼され、藩校の崇徳館で教鞭をとり、新潟町奉行などの要職を歴任した。もとより子弟の教育にも熱心であった。雄七郎の長兄にあたるのが虎三郎である。

小林は、文久年間(1861～1863)に江戸を出て漢学と洋学、さらに横浜でアメリカ人宣教師のデビット・トムソンから英語を学んだ。この時期には中村正直(『西国立志伝』や『自由論』を翻訳・刊行)からも指導を受けていたという。

1868年に開戦した北越戊辰戦争にあたっては、藩士でありながらも、虎三郎の強い指導を受けて、江戸に留まって英語の学習にさらに力を入れた。

1870年に慶応義塾に入学した(最上級クラスの四等)。保証人は長岡出身で同校にて教員を務めて

23) 『文献解題 日本簿記学生生成史』雄松堂出版、1982年、25～26、87～98頁。

24) 梅浦と海老原による翻訳(補正前)は『銀行諸帳面取扱手続書』(上・下巻)として刊行された。一橋大学附属図書館に所蔵されている。

25) 前掲『文献解題 日本簿記学生生成史』123～138頁。

26) 第四銀行企画部(行史編集室)編『第四銀行百年史』株式会社第四銀行、1974年、51頁。本間は取締役・検査役兼公務掛当分貸付掛専務、鈴木は副支配人・計算掛兼公務掛記録方となり、創業期の第四国立銀行の主要実務を担った。

27) 小林雄七郎については、古田島吉輝「小林雄七郎 育英団体長岡社の生みの親」(長岡市編集・発行『ふるさと長岡の人びと』1998年)を参照。



いた藤野善蔵である。ちなみに、同年に長岡から入塾したのは、外山脩造、城泉太郎（徳島慶応義塾校長などを歴任）、牧野鋭橘（同家第14代当主）などであった。当該期における塾生の出身地の上位3藩は中津藩、紀州藩、長岡藩であったことを付記しておく。

入塾時点で、小林は、ピーター・パーレーの『万国史』など講義で使用される英語のテキストはおおむね読みこなせていた。その実力を福沢諭吉から高く評価され、71年に福沢の推薦を受けて、1年間の契約で土佐藩の藩立学校（致道館）へ英語・洋学担当教師として赴任することとなった。同校の運営に尽力したのが山内豊範（土佐藩第16代藩主）である。

小林の赴任に際して、兄の虎三郎も病氣療養をかねて同行した。また、梅浦も高知を訪問したとされる。

小林は英語や洋学のみならず、政治や経済についても広く講じた。

任期を満了して翌72年に東京へ戻った後に、慶応義塾の先輩である塚原周造（後に浦賀船渠を設立）の誘いを受けて大蔵省に出仕した。

前述した長岡での国立銀行の創設にあたり、大きなきっかけとなったのが、小林が華・士族が所有する金禄公債証書の出資が認められる1876年の国立銀行条例の改正に関する情報をいち早く長岡に伝えたことである<sup>28)</sup>。

小林および外山脩造は現職の官僚でありながら（外山については後述）、銀行制度や簿記をはじめとする業務の知識を惜しみなく関係者に対して提供し、大蔵省の関係者への仲介はもとより、渋沢や福沢および松方正義を紹介するなど、全面的に協力して適宜かつ適切にアドバイスをおこなった。これらが銀行創設に裨益するところとなったのである。

外山脩造の足跡についても検討しておきたい。

外山は、1842（天保13）年に越後国古志郡栃尾郷小貫村（現・長岡市栃尾地域）で傳の長男として生まれた（幼名・寅太）。外山家は代々庄屋を務めていた<sup>29)</sup>。

幼少期から漢学・国学を学び、長岡城下で山田愛之助に教えを受けた。梅浦や小林と同門となった。さらに向学心を抱いて江戸に出て、塩谷宕陰（甲蔵）や清河八郎のもとで学び、昌平坂学問所でも研さんを重ねた。同校で漢学を講じていた三島中洲（毅）を介して長岡藩士の河井継之助と知遇を得て、師事することを許された。

三島は、儒学者の山田方谷に学び、備中松山藩に仕官した。1877年には漢学塾・二松学舎を創設している（現・二松学舎大学）。なお、方谷は河井を指導している。

北越戊辰戦争では、長岡藩の軍事総督となった河井に従った。1868年7月に長岡城が落城し会津若松へ敗走するなかで、河井は外山に対し「世の中は大変面白くなつて来た、寅や何でも是からの

28) 拙稿「渋沢栄一と地域経済界の形成—新潟県長岡地域の事例—」渋沢研究会『渋沢研究』第27号、2015年1月、83頁。

29) 外山脩造の事績に関しては、拙稿「渋沢栄一と外山脩造」（『渋沢研究』第25号、2013年1月）を参照されたい。

事は商人が早道だ、思い切つて商人になりやい」<sup>30)</sup>と論じた。この河井からの遺言というべき箴言は、外山の生涯における最大の画期となったのである。

1869年1月に河井の言に従い上京して、慶応義塾に入学した。小林と再び同学となった。71年には開成学校で、さらには共立学舎で洋学を学んだ。共立学舎では梅浦や青柳逸之助と同学となった。従来漢学に加えて、学問的基盤がより堅固なものとなった。

1872年に秋田県令の島義勇から招聘され、県立洋学校の教職に就いた。

1873年に大蔵省紙幣寮に十二等出仕として任官した。これにあたっては、既に紙幣寮に勤務していた小林や慶応義塾で同窓の丹文次郎から推薦があったとされる。

外山は簿記の会読および普及に携わった。外山はその体系を早々に会得し、省内での評価が一気に高まったのである。

本論にもどりたい。梅浦が大蔵省で成果をあげた要因としては、卓越した語学力（英語およびオランダ語）はもとより、漢学や洋学、医学などの様々な学識に加えて、これらを短期間で修得した経験、さらには新たな領域を開拓・深耕する、いわば「学習方法」を身に付けていたことがあげられる。難解かつ複雑な複式簿記の翻訳さらに普及には、これらが決定的に重要であった。高い能力と真摯な姿勢をもって若くして重要な職務に精励した梅浦をはじめ小林や外山などの事績は、相互の関係の緊密化と研鑽の深化も含めて評価する必要がある。

ここからは、シャンドが主導し、関係者が携わった簿記の指導および普及と国立銀行の検査体制の確立および運用について述べることにする。

シャンドや翻訳関係者たちは、『銀行簿記精法』の刊行前から、大蔵省の官僚や第一国立銀行をはじめとする銀行関係者に簿記を教授した。

特に、第一国立銀行の関係者でシャンドから直接を受けたのが、佐々木勇之助をはじめ熊谷辰太郎、本山七郎兵衛、長谷川一彦および野間益之助などである<sup>31)</sup>。

佐々木は、本店支配人や取締役（1896年）を経て、1916年に渋沢の後任として第2代頭取に就いた。東京貯蓄銀行・渋沢倉庫の会長や朝鮮興業の取締役も務めた。

熊谷は、神戸支店支配人や大阪支店勘定改役本務を経て、本店支配人、取締役大阪支店支配人（1896年）などを務めるとともに、大阪紡績の取締役や京都織物の委員・検査掛などを歴任した。

本山は横浜支店支配人心得、長谷川は横浜支店支配人や大阪支店支配人を務めた。野間は最も簿記に通暁し、帳面課長として将来を期待されたものの、1874年に28歳で早世した。

シャンドは『銀行簿記精法』の原文執筆を完了させたのち、夫人と2児を伴って箱根へ静養に出かけた。同地で不幸にも長男が急病により死去した。大きなショックを受けて体調を崩したシャンドは退職を申し出で、大蔵省（紙幣寮）がこれを認めたため、1873年10月から1年間スコットラン

30) 武内義雄編『軽雲外山翁伝』商業興信所、1928年、18頁。

31) 前掲『第一銀行史 上巻』722～728頁。

ドへ帰国した。

翌74年10月にシャンドは再来日し、明治政府は紙幣頭書記官として改めて採用した。契約期間はさしあたり1年間、職務は銀行業務に関する諸事項の質問に応じ、心付きの件には秘惜せずに懇切かつ親切に申し立てることがそれぞれ定められた。

シャンドは、銀行学局にて簿記などの教育に携わった。

銀行学局は、1874年5月に、「洋籍ニ就キ各国銀行ノ例規及ヒ営業ノ次第ヲ講究探知シ国立銀行ヲシテ其方向ヲ知り以テ立ツ所アラシメン」<sup>32)</sup>ことを目的として、若手官僚の人材育成のために紙幣寮銀行課内に設置された。10名の官僚が就学した。

大蔵省は、当時の状況について「普通ノ學術アルモノハ世間其人ニ乏シカラスト雖モ其能ク銀行ノ事業ニ通スル者ニ至テハ実ニ寥寥」<sup>33)</sup>、「特ニ其人ヲ陶成スルニアラサレハ則チ他日銀行事務ノ拡張ヲ望ムモ得ヘカラサル」<sup>34)</sup>と厳しい認識をもち、その打開を意図したのである。

銀行学規則第一条によると、「銀行学講究ノ一部ヲ設ケ各銀行事務ニ関スル諸条例ノ成規及ヒ簿記ノ方法ヲ調査シ又ハ洋書ニ付テ訳出シ例規ノ便否ヲ詳悉シ今後ノ考案ヲ画シテ紙幣頭ニ稟義スルヲ主務」<sup>34)</sup>とあり、教育に加えて調査や政策立案も構想されていた。

初代局長に日下義雄、簿記担当に宇佐川秀次郎、経済書担当に三輪信次郎、数学担当に生島準、事務担当に遠藤敬止が就いた。

日下は1852（嘉永5）年に会津藩侍医の石田龍玄の長男として生まれ、藩校の日新館で学んだのちに鳥羽・伏見の戦いや戊辰戦争に従軍した<sup>35)</sup>。1871年に井上馨と知り合い、遣欧岩倉使節団に加わった。さらにアメリカやイギリスで経済学を学んだ。74年に紙幣寮七等出仕となった。その後内務省権大書記官や農商務省大書記官を経て、86年から89年に長崎県令・県知事、92年から95年に福島県知事を務めて産業振興やインフラ整備に力を尽した。実業界に転じて、第一銀行の監査役（1896年～1908年）や取締役（1908年～23年）をはじめ、渋沢が関係する東京貯蓄銀行や渋沢倉庫、岩越鉄道（現在のJR磐越西線のルーツ）や京釜鉄道、朝鮮興業や馬來護謨公司、東邦生命保険や東邦火災保険、浦賀船渠などの役員を務め、梅浦と同様に、渋沢の企業者活動を支えた。

三輪は、1854（安政元）年に金沢藩士の伝作の次男として生まれ、金沢城下の私塾・明倫堂で学んだ。慶応義塾に進んだものの学資が欠乏したが、幸いにも先述した翻訳局上級生徒として採用され、学習を継続できた。銀行学局所属以降は、銀行課翻訳掛で宇佐川とともに銀行や簿記に関する翻訳・調査・教育を手がけ、その後は十五銀行の取締役や凸版印刷の有限責任社員・相談役、衆議院議員

32) 「銀行学局設立ノ儀ニ付何壇内規則」（日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治大正編 第三巻』大蔵省印刷局、1957年、469頁）。

33) 『銀行課第一次報告 明治六年七月至明治十二年六月』1880年1月、2～3頁。

34) 前掲『日本金融史資料 明治大正編 第三巻』470頁。

35) 中村孝也『日下義雄伝』日下義雄伝記編纂所、1928年。

などを務めた<sup>36)</sup>。

遠藤は、1851（嘉永4）年に会津藩士の嘉内の長男として江戸藩邸で生まれた。幼少期から学問に親しみ、会津に戻った後には向上心がますます高まり、志願が認められて江戸に出て開成所で学んだ。鳥羽・伏見の戦いから会津軍に参戦し、鶴ヶ城の戦いでは藩士を率いて籠城し奮闘したものの満身創痍の後に捕えられ、増上寺に幽閉された。69年に赦された後には山東直砥が率いる北門社で英語を教えた。71年には慶応義塾に入学した。銀行学局所属以降は銀行学伝習所講師などを務めた。その姿勢が渋沢に認められて第一国立銀行にスカウトされ、第七十七国立銀行（後の七十七銀行）に派遣された。同行の第2・4代頭取を務めるとともに仙台商法会議所（後の商業会議所）会頭や仙台市収入役なども歴任し、「仙台の渋沢栄一」というべき存在であった<sup>37)</sup>。

銀行学局の構成は、予科（6ヵ月）の科目は翻訳書を講読したが（経済学は洋書）、本科（3年6ヵ月）は全ての科目で洋書が用いられ、ハイレベルかつ理論的であった。

もとより銀行学局の開設時にはシャンドは帰国中だったものの、カリキュラムや育成方針についてはシャンドの意向が大きくはたらいたとされる。

1875年からは、従来の官僚に加えて国立銀行および民間企業の若手従業員を自費通学生徒（「銀行学伝習人」）として受け入れ始めた。

1876年7月の修了者のなかには紙幣寮に採用される者もあった。

同年には銀行学局が廃止され、銀行課に翻訳掛を新設して教育を継続した。翌77年1月に紙幣寮が廃止され、銀行課は大蔵省直属となった。これを受けて、同年2月に銀行学伝習所が改めて開設された。従来の官僚や民間従業員に加えて、全国の道府県庁に設置された銀行掛の担当者も受け入れた。同所は79年2月に廃止を余儀なくされたが、それまでの修了者は341名に達した。彼らは大蔵省や各地の銀行・企業および地方庁で活躍し、簿記の普及に寄与したのである。

大蔵省は「我銀行ノ基本ハ右等学徒ニヨリ建立シタリト云モ過言ニアラサルヘシ」<sup>38)</sup>と各組織による人材育成の成果を強調している。

国立銀行の検査については、白坂亨氏の詳細な研究により、小林雄七郎が開業直後の第一国立銀行の検査にあっていたことが明らかになった<sup>39)</sup>。

第一国立銀行が開業して3か月余が経過した1873年11月4日から5日にかけて、海老原済と検査に入った。11月2日の帳簿に基づき貨幣（金貨・銀貨）および紙幣などの現物有高をチェックし、5日の総有高を差し引いた総計を紙幣頭に報告するなど子細にわたるものであった。この検査で注目

36) 前掲「開化政策と翻訳・洋学教育」119～122, 142～143, 151～152頁, 凸版印刷社史編集委員会編『凸版印刷株式会社六拾年史』凸版印刷株式会社, 1961年, 11～14頁, 36～38頁。

37) 遠藤敬止の足跡については、さしあたり、拙稿「簿記普及の知られざる立役者たち」第9・10回（中央経済社発行『企業会計』2020年9・10月号所収）を参照いただきたい。

38) 前掲『銀行課第一次報告』3頁。

39) 『わが国会社財務制度の形成過程に関する研究』〔大東文化大学経営研究所研究叢書31〕大東文化大学経営研究所, 2013年。

すべきは、同行から「出納日表」と「借貸一覧日表」が提出されたことである。特に後者はいわゆる貸借対照表の原基的形態とみなしえる。

同月 28 日から 29 日に川村選（紙幣大属）と東京為替会社へ、翌 12 月には野田久六郎（十三等出仕）とともに開業前の第二国立銀行へ検査に入っている。

1875 年 3 月から、シャンドおよび須藤時一郎や銀行課メンバーが第一国立銀行に対する本格的な検査に着手した。

当時の各国立銀行は諸帳簿の整備が遅れ、簿記の知識も十分ではなかった<sup>40)</sup>。これらを正す意図もこめられた。

その内容は、負債、預金（定期・当座・別段）、貸付金・当座預金貸越（特に大口先）、貸付先の資金使用動向など多岐にわたった<sup>41)</sup>。

シャンドが主導した検査は、業務履行状況や計数面および法令・制度の遵守のチェックに加えて、経営改善に向けての指導も含んでおり、各行の経営と存続には有益であった。

シャンドの検査は緻密かつ厳格そのもので、後に渋沢は「今日の大蔵省の検査などとは比較にならないもので、あゝまでしなくてもよからうと思はれる程」<sup>42)</sup>とふりかえっている。

第四国立銀行には、開業直前の 1874 年 2 月に宇佐川秀次郎と進野簡が検査に入り、同年 11 月にはシャンドが検査に赴くとの通知が紙幣寮からなされた<sup>43)</sup>。

銀行課所属の銀行検査官としての職位で、外山脩造が第一および第四・六（福島）十（甲府）十四（松本）十六（岐阜）十九（上田）二十四（飯山）二十六（大阪）国立銀行、遠藤敬止が第十六国立銀行を検査したとの記録がある<sup>44)</sup>。

### III. 新潟県庁および新潟学校での事績

梅浦は、1873（明治 6）年に新潟県令の楠本正隆から任命されて、一等訳官に就いた。詳細な時期は不明であるが、シャンドの翻訳が手を離れたタイミングと思われる。

新潟港は、よく知られているように、1858 年の日米修好通商条約により定められた開港五港のうちの 1 つで、1868 年 11 月 19 日（新暦では 69 年 1 月 1 日）に開港を果たしたものの、外国人との交流は不十分な状態であった。

前年の 72 年 5 月に外務大丞から県令となった楠本は、新潟町のみならず県全域の国際化および近

40) 前掲『銀行課第一次報告』19～20 頁。

41) 前掲『第一銀行史 上巻』214～234 頁。

42) 同上書、721 頁。

43) 前掲『第四銀行百年史』51～52、57～58 頁。

44) 大蔵省銀行課刊行『銀行雑誌』各号（日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治大正編 第六巻』大蔵省印刷局、1957 年所収）。この編纂事務は遠藤敬止や田口卯吉が担った。



代化のスピードアップを強く志向した<sup>45)</sup>。

楠本は機構改革をおこない、従来の4課（庶務・聴訟・租税・出納）に加えて、外務課を新設した。本庁在勤2名（判任官）、税関在勤11名（判任官3名・等外吏8名）および訳官が2名（判任官）の全14名からなる<sup>46)</sup>、地方庁では珍しい編成であった。

楠本は、外務省でナンバー3の職位を務めた経験や人脈および情報に基づき、外国語や西洋事情に通曉し洋学・英学および英語翻訳の世界で高い評価を得ている新潟県人の梅浦に地域の国際化の推進役として着目し、これに対して、梅浦は、開明的で知られる楠本のもとで自らのスキル・ノウハウを大いに発揮して地域に貢献できる貴重なポジションであることに加えて、故郷であること、さらには大蔵省時代よりやや格上となることも含めて、就任を承諾したと史料される。

楠本は、着任直後から国立銀行条例の公布をふまえて新潟での創設を強く勧めたが<sup>47)</sup>、梅浦からのサジェスションがあった可能性がある。

梅浦は訳官とともに、新潟県立の新潟学校の運営も担うこととなった。

同校については、卒業生で早稲田大学初代図書館長や衆議院議員などを務めた市島謙吉（春城）による「新潟学校時代」（『春城代酔録』中央公論社、1933年所収）および新潟県教育百年史編さん委員会編『新潟県教育百年史 明治編』（新潟県教育庁、1970年）に基づいて記していく。

新潟県と明治政府が協議して、新潟町に1869年4月に英学校が立ち上げられ、アメリカ人の宣教師のS. ブラウンが赴任した。その後ブラウンと県とが齟齬をきたしたため、71年にイギリス人の電信機技術者のE. キングに替わった。しかしキングが傷害事件に巻き込まれて横浜に去ったため、教育水準が下がり、学生数も減少し、同年9月に洋学校と改名したものの、72年10月には廃止を余儀なくされた。

こうした事態を憂いた新潟町戸長の石附五作などが間もなく洋学校を立ち上げた。洋学教育の重要性と継続の必要性を認識していた楠本が同校に着目し、1872年11月に県立に改組した。

楠本は率先垂範して、県内各地で学生および寄付金の募集をおこなった。

1873年4月にイギリス人で横浜にて新聞記者をしていたエドワード・ジェームス・モスを招聘し、翌5月には新潟学校と改称して、白山神社境内地にあった備荒米蔵跡に新校舎を建設した。

校長に二橋元長、校監に橋口正弘が就いている。

梅浦は、教頭として、教学の責任者となった。主に上級クラスさらに教員に対して、倫理や経済さらに物理・科学に関する当時としては最高水準の外国書の講読（「輪講」を採用）、英字新聞の和訳、自ら執筆した文章など（課題には「民選議院設置之議」もあったという）の英訳を課した。梅浦が

45) 楠本県政に関しては新潟県編集・発行『新潟県史 通史編6 近代一』（1987年）の第三章第一節「県令楠本正隆の施政」、新潟町の変容に関しては新潟市史編さん近代化部会編『新潟市史 通史編3 近代（上）』（新潟市、1996年）の第二章第二節第一項の「新潟町の町政改革」を参照のこと。

46) 「新潟県史 制度部 職制 地方官一」1873年（新潟県編『稿本新潟県史 第11巻』1992年、所収）。

47) 株式会社第四銀行発行『第四銀行八十年史』1956年、3～4頁。

修正を加えた和訳文を各種新聞に積極的に投稿しその多くが採択された。いずれも英文法の基本を重視しつつも実践的な内容であった。

新潟学校の出身者には、山口権三郎とともに日本石油を創業し初代社長を務めた内藤久寛、衆議院議員として普通選挙の実現や大河津分水開削などの信濃川の治水事業に力を入れた大竹貫一などがいる。

内藤は、自叙伝の『春風秋雨録』（1919年刊行）のなかで、「東京の実業界に一時名を馳せた刈羽郡（古志郡の誤り：引用者）の出身の梅浦精一氏が、当時県庁に在りて大属を務め、傍ら同校の教頭を兼ねて居た。入学の時は梅浦氏が問題を出して試験した」（47頁）とふりかえっている。内藤は1897年5月から12月に農商務省嘱託としてアメリカとロシア、1904年3月から8月にアメリカへわたり石油業の最新事情を見聞した。子細にわたって調査し、詳細な報告書をまとめており、青年期に育まれた英語力が活かされたといえる。

また、鍵富徳次郎（新潟倉庫社長・新潟株式取引所専務理事・第四銀行取締役・宝田石油監査役・新潟商業会議所常議員）、栗林貞吉（安進社専務取締役・新潟商業会議所常議員）、荒川才二（新潟鉱油社長・新潟硫酸専務取締役・新潟運送取締役・新潟商業会議所常議員）も在学しており<sup>48)</sup>、新潟市域の企業家ないし財界人に影響を与えたことも留意すべきである。

1873年6月の柏崎県の新潟県への編入を契機として、楠本は同年9月に新潟学校を本校、長岡・柏崎・新発田・高田洋学校を第一・二・三・四分校とする再編成を断行した。これに最も反対したのが長岡洋学校（三島億二郎が主導して72年創設）である。教員の中軸であった藤野善蔵（慶応義塾出身）が辞職し、衰微をきたした。楠本は第一分校の立て直しに梅浦を起用した。梅浦は英語教育と学校運営にその才能をいかんなく発揮し、さらに混迷した組織のマネジメント力を身につけることができた。当時の在学生には、波多野伝三郎や井上円了（東洋大学の創設者）、根岸鍊次郎、長尾平蔵、西協国三郎などがいる<sup>49)</sup>。

#### IV. 内務省への出仕および文部省『百科全書』編纂への参画

1875（明治8）年11月に楠本が内務大丞に累進した。梅浦は後を追うように上京し、越後国頸城郡津有村（現・新潟県上越市）出身で内務大丞および駅通頭と諸規則取調掛長を兼任していた前島密に身のふり方を相談した。梅浦は、故郷の資産を売却し資金を捻出して欧米諸国へ留学するとの決意を語った<sup>50)</sup>。これに対して、前島は慌てずに時機を待つべきと説得し、内務省勸業寮への出仕をアレンジした。もとより楠本の支援もあったはずであろう。

翌76年には、多田元吉や石河正竜とともに、紅茶やインディゴの貿易および栽培技術伝習事業の

48) 彼らの経歴等については、小林力三編纂『新潟商工会議所六十周年史』新潟商工会議所、1958年に拠っている。

49) 藤田士郎編『会員名簿 昭和二十六年九月現在』長岡高等学校同窓会、1951年。

50) 山寺清二郎編『東京商業会議所会員列伝』聚玉館、1892年、131頁。

通訳としてインド・アッサム地方へ派遣された。帰国は1年後の77年であった。

この要務では、必要に応じてないし状況次第でヨーロッパへ出向くことは可能であったものの、梅浦は不慣れなインドで職務に精励し続けたという<sup>51)</sup>。その性格を反映している。

この間の梅浦のキャリアとして特筆すべきは、文部省による『百科全書』の訳出に参画したことである。この大規模な翻訳事業に関しては長沼美香子氏による詳細な研究がある（『訳された近代文部省「百科全書」の翻訳学』法政大学出版局, 2017年）。これについての史実は同書に拠っている。

文部省は、1871年から、西洋の諸分野ないし領域の知識を広く啓蒙・啓発するために、イギリス人のウィリアム&ロバート・チェンバース兄弟が刊行した *Chambers's Information for the People* (第4版・1858年) を76名の翻訳者・校正者の協働により訳出させ、73年から全97編を刊行した。明治初期の政府が主導した近代化のための壮大なプロジェクトの1つである。

梅浦は、1877年に発刊された『織工篇』の翻訳を担当した（校正は文部省編書課員の内村耿之介）。梅浦が起用されたのは、様々な文献を発刊して高い評価を得ていた洋学・英学研究者かつ翻訳者であったことはもとより、文部少博士兼司法少判事や編輯局専務および太政官翻訳局長を歴任してこの事業を主導した箕作麟祥が秋坪と姻戚関係であったことも要因と考えられる。

以下に『織工篇』の冒頭ないし序にあたる部分を長文ではあるが引用しておきたい<sup>52)</sup>。

「テクスタイル、マニウファクチュール」織工トハ、亜麻、平常ノ麻ト其種類異ナリ  
綿、絹、或ハ毛糸等ヲ以テ、麻布、細布、白洋布、班布、絹布、縐布、小絨、大羅紗、其他人  
ノ能ク知レル凡百ノ異種ヲ製織スルヲ云フ、今又此字義ヲ拡充シテ、凡ソ其製造ニ必ス動植物  
ノ纖維ヲ要スベキ、各種ノ織工物ニ及サン、即チ紙、毛氈、稿條等是ナリ、此各般ノ製造ヲ為  
サンニハ、初メ粗悪ノ品類ヲ取り、之ヲ漸次ニ精製シテ、以テ一種ノ要用品、或ハ奢侈物ト為  
スニ至ルマテハ、力役ノ勞、器械ノ用法、化学ノ精練、及ビ夥多ノ資金ト無量ノ辛苦トヲ要セ  
サルベカラス、是レ此織工ノ業ハ我が国民産業ノ区域ニ入ルベキ各般ノ製造中、敢テ他ニ其級  
位ヲ譲ラザル所以ナリ、今此製織法ノ精微ニ至ルマデ、悉ク詳説セント欲スレハ、啻ニ此小冊  
子ノ能ク説尽シ得ザルノミナラズ、尚ホ千百図解ノ補助ヲ需メ、又稍々此実業ヲ撿スルニアラ  
ザレバ、決シテ了解スルコト能ハス、故ニ今其概略ヲ左ニ挙テ、以テ其大意ヲ示サランコトヲ  
欲スルノミ

概略と断っているものの、各種織物の原材料、製造方法や機械の動向さらには品質の問題も取り上げていること、織物のみならず製紙についても講説していることは注目に値し、後の梅浦の企業者活動にも直接、間接を含めて生きる場所となったのである。

51) 前掲『財界名士失敗談』159頁。

52) 本引用は、青史社が1984年に刊行した『文部省百科全書5』に拠った。

## 今後への展望

梅浦は、農商務省勸商局長の河瀬秀治に推薦されて、1879（明治12）年に東京商法会議所の書記となり、その実務を担った。会頭の渋沢は、梅浦の傑出した能力や人格を高く評価した<sup>53)</sup>。

その後、渋沢の勧めを受けて東京石川島造船所の経営に携わり、会長となった渋沢のもとで専務取締役次いで社長を務め、その成長を積極果敢にリードした。

梅浦は、渋沢とともに、広島水力電気や東京湾汽船、名古屋瓦斯、北海道瓦斯、函館水電、八重山糖業、東京水力電気、東京電力などの設立と経営に関与した。また、後藤毛織や神戸海上運送火災保険などの経営にも関わった。新潟県内では、北越鉄道をはじめ東山油田で石油採掘を手掛ける北越石油（長岡の小坂松五郎や横山栄七に加えて大倉喜八郎や浅野総一郎さらに渋沢も関係）、上越電気や高田羽二重などにも関与し、新潟県の近代ビジネスやインフラの発展に貢献したのである。

これらの実態の分析は、次稿以降にて進めていくこととしたい。

### 【謝辞】

筆者が経営史の学界に参加して25年以上が過ぎたが、この間、柴孝夫先生は仰ぎ見る存在であった。幸いにも2019年4月より同じ職場で御一緒することとなり、先生の川崎造船所・川崎汽船の経営史、平生夙三郎の企業者活動と社会貢献活動（甲南学園やロータリークラブ）、三菱財閥史などの論文や長年携われた会社史・業界史・自治体史を再読し、また、日本経営史やフィランソロピー史の教育方法についてアドバイスを頂き、ともに裨益するところ大である。

先生の研究テーマとは関連が薄いと思われたが、川崎造船所や川崎汽船で活躍した鑄谷正輔や大久保賢治郎が筆者のテーマの1つである新潟臨港開発（現・リンコーコーポレーション）の社長を務めており、縁を感じているところである。

先生から伺った宮本又次・作道洋太郎・三島康雄各先生および門下の各々についてのお話は貴重なものばかりであった。

末筆となるが、今後益々の御健勝および研究の御進展と御健筆を祈念する次第である。

53) 「梅浦精一君の死去」『竜門雑誌』第286号、1912年3月、68頁（渋沢栄一記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料第五十二巻』渋沢栄一伝記資料刊行会、1963年、566頁）。

## Entrepreneurship and Management of Seiichi Umeura (Part I)

Kazuaki MATSUMOTO

### ABSTRACT

Received the tremendous trust of Eiichi Shibusawa and played an active role as one of the business partners, "Footprints of Shibusawa", the most reliable I would like to take up the footsteps and activities of Seiichi Umeura (1852-1912) from Nagaoka, who was described as a subordinate (meaning confidant).

Umeura was born as the eldest son of Shusuke, a doctor of the Nagaoka domain. Shusuke served as a clan doctor of the Nagaoka domain, and was an advanced and excellent Hanlan eclectic doctor who was a long-time doctor in both Eastern and Western medicine. He excels in the field of surgery today, such as spreading vaccination in Nagaoka.

Umeura was strongly influenced by Shusuke, who had a deep knowledge of Chinese studies, and became interested in learning from an early age. From the age of 10, Aizawa Nanjo presided over in Nanjo Village, Kariwa District (currently Kashiwazaki City). He started studying Chinese studies.

Then, Umeura studied Dutch under Ainosuke Yamada, a representative Confucian scholar of the Nagaoka domain.

Although he went to Edo from the age of 13 to study Western medicine, his tuition fees did not continue and he turned to Western studies.

Entered the Ministry of Finance in 1872, and under the guidance of Alexander Allan Shand, with Yushichiro Kobayashi and others, translated the double-entry bookkeeping that we are currently using. It was completed as "Bank Bookkeeping Method". Syuzo Toyama is one of the people who contributed to the spread of double-entry bookkeeping.

In 1873, Umeura was invited by Masataka Kusumoto of the Niigata Prefectural Ordinance to become the first translator. At the same time, he was in charge of the Niigata School, a Western school founded under the initiative of Kusumoto, and taught English to teachers in addition to students. The school is the beginning of a secondary education institution in Niigata Prefecture. In addition, he taught at the Niigata School No. 1 Branch School, which is the successor to Nagaoka Western School.

**Keywords:** Seiichi Umeura, Western Studies, Eiichi Shibusawa, Bookkeeping, Yushichiro Kobayashi & Syuzo Toyama, Niigata Western School